



ネパール大震災に遭遇して

ネパール震災記

現地で体験した事実を報告する

中野裕隆

1. はじめに

ネパールに大地震が起きたとき、私はカトマンズにいた。就学援助をしてきた子供たちの卒業セレモニーの日だった。

苫小牧ネパール協会(尾崎徹会長)は1996年に設立され、2001年からは貧しい家庭の子供たちの就学援助を続けてきた。中学校を卒業した生徒を祝うセレモニーを毎年、4月の末に行っていた。私は設立時から理事として参加してきた。3月に職を離れ時間ができたので、尾崎会長に誘われて初めてネパールを訪問した。会長とのふたり旅である。

21日にカトマンズに入り、そこを拠点に、近郊のバクタプルや地震後には西方200キロの古都ポカラを訪ね、29日に戻って翌日ネパールを離れた。卒業セレモニーは中日の25日である。

日本での地震報道と現地での体験とのギャップがあまりにも大きいことに違和感を覚えた。報道を見ると、まるでネパール全土に被害が広がり、国中が避難民であふれかえっているかのようだ。しかし、被害は限定的で、しかも特定の場所で起きたに過ぎない。

加えて、貧困国特有の事情もある。停電、断水が当たり前、救助のためのまともな機材もない国だ。何もかもがそろっている先進国の価値観で、悲惨だと判断しても意味がないのだ。

事実は大切だ。しかし、視聴者、読者受けを狙って一部しか報道しないのでは、偏っていると言わざるを得ない。私はネパールで体験した事実を報告する。地震が起きたときの状況、被害、現地の人たちの生活などである。あわせて、日本に帰ってきてから考えたことを^{しる}記す。

2. 地震はいきなり横ゆれから始まった

卒業セレモニーの会場は、持ち回りで当番校にあたったパタンのラリットビカス小中学校にある別棟3階の大教室だ。建物はイギリス人の寄付による、鉄筋コンクリート造りの3階建て。1階が広場に向けて開放されたホールになっている。

パタンはカトマンズと市街地が連坦し、バグマティ川が境界となって、南側がパタンである。カトマンズとパタンの市街地は狭く、泊まっていた、前王宮(現博物館)に近いホテル「ロイヤル・シンギ」から学校までは、南に6キロほどの距離しかない。

カトマンズの東10キロに古都バクタプルがある。このさらに奥にも支援校がある。マッラ王朝が3王国に分裂する15世紀からシャハ王朝に征服される18世紀まで、カトマンズ、パタン、そしてバクタプルの3都市にそれぞれ国王がいて、世界遺産に指定されるほどに壮大で華麗な王宮や寺院を競い合って建てた。地震によって、それぞれの旧王宮広場にある王宮や寺院は壊滅的な被害を受けた。

ちなみに、カトマンズ、パタン、バクタプルの人口は、2005年推計で、79万人、18万3千人、7万7千人である。カトマンズの一極集中が著しい。2011年には100万人を超えた。

セレモニーに集まる学校はカトマンズやバクタプル周辺の5校だ。参加するのは、現役の小中学生と卒業生の約70名、そして付き添いの校長、教師たちだ。支援を始めてから14年間経つので、1期生の最年長者は24歳になる。少しずつ子供たちが集まり始め、用意した遅い朝食を取って約90名が会場に上がった。セレモニーは、11時50分ころから始まった。私たちと校長だけが椅子に座り、子供

たちは床に座っていた。

地震は、苫小牧ネパール協会の尾崎会長が冒頭の挨拶をしている最中に起きた。いきなり大きな横ゆれが来た。子供たちは悲鳴を上げ、大きなゆれの中、会場から入り口に逃げ出そうとした。通訳をしていたネパールでの支援者であるサローズが、立ったまま、落ち着くようにと、大声で逃げるのを抑えた。

ゆれは大きく、長く続いたように感じたが、動画を見ると1分ほどだ。サローズにゆれの方向を聞いた。東西だという。震源地はカトマンズの西方80キロのゴルカであることが間もなく分かった。ゴルカはイギリス軍を苦しめたグルカ兵の故郷であり、前シャハ王朝の発祥の地である。

体感では、ゆれの大きさは東日本大震災のときに似ている。ノートには震度4、5と書いた。立ってられないほどの地震ではあったが、物は倒れていないので震度6までではない。実際、下の調理場でガスコンロを使ってカレーライスを作っていたが、火災は起きず、鍋は落ちなかった。ゆれが治まって時計を見ると午後0時ちょうど。最初の余震が来る。地震は11時56分に起きたことがあとで分かった。

子供たちは地震が治まると急ぎ外に出た(写真-1)。外の広場に出ると、盛んに自宅にスマホや携帯で連絡を取っている。チャリンから来たアヌーの自宅が壊れた。父親も教師としてセレモニーに出席していた。苫小牧に来たことがある支援1期生のラクシミの家も壊れたことが後で分かった。室内に残った大人たちも自宅や知人に連絡を取り合った。



写真-1 地震直後に避難した子供たち

マグニチュードは7.5。ビムセン・タワーが倒れ

て24名が亡くなったというニュースが入る。マグニチュードはのちに7.8に訂正された。

その後も余震が続き、0分から始まって、8分、10分、12分、15分、20分、24分、29分、30分と30分間に9回起きた。8分の余震は震度2、3クラスと大きい。30分の余震は不思議なことに南北にゆれた。午後1時までさらに3回起きた。40分の余震は縦にだけ2回、ドンドンと動いた。余震が来るたびに下から子供たちの悲鳴があがった。

私たち日本人は地震を経験しているのだから、本震を超える余震はないことが分かっている。午後1時を過ぎても会場に残っていたが、誰も戻ってこない。ネパール人にとっては大変な恐怖なのだろう。

私たちがいる鉄筋コンクリートの建物が壊れるとすれば、学校の周りがあるレンガ造りの建物がすべて壊れてしまうはずだ。レンガの建物に囲まれた狭い広場にいるよりは、私たちの建物にいるほうが安全なのだ。

窓から見渡すと、3、4メートルの狭い路地を挟んで、4階、5階建てのレンガ造りの住宅がすき間なく建ち並んでいる。日本と違うのは、それぞれの住宅の間口が狭いことだ。6メートルや8メートルの間口で5階建てはざらだ。

間^{ひら}で表現する日本の間口のような決まりはない。レンガのサイズも決まってないと言うのだが、本当だろうか。隣家と、壁と壁を接して建物は上に伸びていく。当然エレベーターはあるはずもなく、高くても階段で上っていくことになる。周りの建物で崩れたものはなく、屋上パラペットの笠木に置かれた鉢は残ったままだ。ゆっくりとしたゆれだったようだ。

外観から、鉄筋コンクリートの柱と梁が赤いレンガに白く浮かび上がっているのが分かる。建物はレンガの壁がなくとも、柱と梁に支えられて倒壊しないのだ。

聞くと、日本と同じ建築確認制度があるようだ。審査をして政府が許可する。ただし、工事のほうは手抜きもあって保証できないという。前日バクタプルで建築現場を見たが、コンクリートは回転ドラム

による現場練りで、できあがると女性の作業員が背負子しよこに入れて運ぶ(写真-2)。



写真-2 バクタプルでのコンクリート練り

子供たちは建物に入ろうとしないので、セレモニーは広場ですることにした。ホールにテーブルを置いて、午後1時15分ころから始まった。学校前の通路には、近所の人たちが戻ってきて洗い物を始めている。

挨拶やプレゼント、そして、午後3時から子供たちが楽しみにしている日本製のカレーを食べるカレータイム。100人分用意したカレーを食べ終わると、不安を抱えながら、急いで、チャーターしたバスに乗って地元に戻っていった。

ネパールでは、16歳になると、暗記中心のSLC試験という全国統一学力試験がある。60点以上取らなければ、大学、短大には進めない。80点以上取れば、医学部でもどこでも好きな大学を選ぶことができる。今回、支援してきた生徒から2人目の80点が出た。ひとり目は医者の卵だ。

いい成績をとるために、金持ちは子弟を小学校から私立にかよわせる。授業はすべて試験科目でもある英語だけで行われる。学費は月にひとり1万ルピー(約1万2千円)かかる。私たちが支援しているのは、年間ひとり1万円だ。金持ちの子供たちだけが有名大学に進める仕組みだ。

日本でも共通一次試験(いまの大学入試センター試験)の導入を契機に、私立中学の急増と公立教育の衰退が始まった。ゆとり教育の導入はそれに拍車をかけた。国は貧富の固定化を進め、子供たちの学力を低下させたことになる。

3. 地震直後の街を歩く

(1)パタンの街

私たちは、あと片付けが終わってから、午後3時40分ころ学校をあとにして、サローズと地元の支援者夫妻とともに5人で、カトマンズに向けて歩き出した。地震発生から4時間になろうとしている。ネパール協会の他の3名の支援者はオートバイで自宅に帰った。学校からカトマンズとの境界のバクマティ川までは1キロしかない。

学校の周りでは建物の被害はなかったが、通りに出ると建物の被害に出会う。通りといってもほとんどが4メートル以下の幅しかない。歩き出してすぐに、壁が崩れた建物を所どころに見る。壊れているのは、柱のない壁構造の建物ばかりだ。しかも、一目で古いことが分かる。壁のレンガが風化して丸みをおびて、黒くなった上に白っぽく粉を吹いている。学校はパタンの旧王宮広場に近いために、周囲には寺院や古い建物が多い。

狭い通りに面して、建物が間口を狭く上に高さを延ばしていく。しかも、建物同士が壁を接して横に街区いっぱい連なっている。まるで中層の長屋である。日本だと、1階、2階と階ごとに横に部屋を使うために、共用部分のある共同住宅となる。建物の高さは最低でも4階建て。5階6階建ては当たり前にあるので、それに比べ通りが狭く逃げる場所がない。通りは2、3メートルの所もあって、上からレンガが落ちていて危険だ。サローズはできるだけ広い通りを選んで歩く(写真-3)。



写真-3 パタンの狭い通り

被害はすべてレンガ造りの建物である。倒壊までいかなくても、壁の目地に沿ったクラック、部分的なレンガの破損、壁の傾き、壁の膨らみ、屋根の破損などがあった。傾いた建物や壁が膨らんだ建物には、竹をつっかい棒にして支えていた(口絵-23)。

塀はほとんどが倒壊や破損している。レンガは建築材として何度も使用される。使用できなくなったレンガが塀の材料になるのだ。レンガの塀は鉄筋もなにもなく、ただ積んでいるだけだ。人間がぶつかっただけでも倒れそうだ。

自動車がすれ違うことのできる幅8メートルほどの大きな通りに出ると、角の広場にたくさんの人が集まっている(口絵-19)。建物の倒壊が怖くて、できるだけ離れようとして広場に集まるのだ。

この広場のすぐ横で、街区いっぱい^{つな}に繋がった中層建物のなかで1軒だけが崩壊している(口絵-20)。崩れた建物は、外壁が40センチほどの厚さがあるが、レンガが黒ずみ表面だけが白っぽくなって、いかにも古いという感じだ。向かって右隣は柱、梁がみえ、もういっぽうの左隣は同じレンガ構造で壁を共有していたが、崩れていない。違うのは、1階部分をモルタル被覆し、2階以上の外壁を赤く塗装していることだ。しかし、共有していた壁が崩れ、壁にはクラックが走り、もう使用できないようだ。

近くで建築中の建物があり、コンクリートで柱、梁、床が造られている様子が見える。壁のレンガはあとからはめ込むのだ(口絵-19)。



写真-4 サローズの家に接して工事中の隣家

実際に施工している現場を見ると、外壁の厚さはレンガ2列分、屋上のパラペットは1列分しか

ない(写真-4)。これをセメントで接着させるだけだ。モルタルで仕上げるが、鉄筋が入っていないことを考えると、屋上でパラペットにもたれることはできない。

壁構造でもレンガにモルタルを被覆した建物は崩れてはいない(写真-5)。モルタルが接着剤として効果があるのだろう。寺院も含め古い建物はセメントのない時代は、どのようにしてレンガを接着させたのか不思議である。しかも、いまでも貧しい人たちはセメントを買うことができない。そうした地域では大きな被害が起きているはずだ。地震直後に話題になったのは、死者は1万人位になるだろう。そして、その多くは田舎だろうということだ。カトマンズのような都市では、建物は新しく、セメントを使うことができるぶん頑丈だ。



写真-5 モルタル被覆したレンガ造りの建物

都市では、十分ではないが、比較的機材があり人もいて、救援活動は容易だが、田舎は機材も人もいない。そもそも、田舎に行く道路すらないのだ。直近のバス停まで歩いて1日以上かかる集落はあたりまえにある。増え続ける死傷者の多くは僻地の山村から報告されていることがその表われだ。

なぜそのようなところに住むのかというと、増え続ける人口を吸収できるのは農業しかないからだ。ネパールの人口の7、8割は農業に従事している。都市近郊には土地がないために、農地を求めて僻地に向かい、山に昇って田畑を切り開く。労働力を必要とするため子供が増える。

増えた人口を養うために農地がさらに必要となる。悪循環である。子供たちが学校に行くのは不可

能だ。そもそも学校などない不便な場所にしか土地はないからだ。識字率は20パーセントに落ちる。

パタンの旧王宮広場を横切ろうとして見ると、人だかりで中が見えない。近づいていくと寺院の一部が倒壊している(口絵-21)。ロープで人の出入りを禁止して、盛んに崩れたレンガを取り除いていた。

ネパール国内には4箇所のユネスコ世界遺産がある。そのひとつ「カトマンズ渓谷」(カトマンズ盆地)には7箇所の重要文化遺産がある。①カトマンズの旧王宮広場、②パタンの旧王宮広場、③バクタプルの旧王宮広場、④スワヤンブナート、⑤ボダナート、⑥パシュパティナート、⑦チャング・ナラヤンである。パタンの旧王宮広場を除いて、前日までに見て回った。パタンだけはセレモニーのあとに見学することになっていた。

旧王宮広場からカトマンズまでの間、寺院と塀の崩壊を多く見る(口絵-22)。共通しているのは鉄筋が入っていないことだ。ネパールは木材が貴重なために、建材はどこにでもある土を焼いたレンガである。セメントがない時代に建築した寺院や古い建物は、レンガを接着するためにレンガの材料と同じ土を使ったのであろうか。おそらく、いまでも田舎では、貧しい人たちは昔と同じ造り方をしているのだろう。接着力が弱いために簡単に崩れてしまう。

旧王宮広場から離れるにしたがって新しい建物が多くなり、壊れた建物を目にする事はない。ただ、広場や空き地があると、そこには必ず人が集まっている。建物はまったく無傷である。余震が怖いのだ。

ネパール人は少数民族であるネワール族の文化や習俗を強く受け継いでいる。ネワール族はカトマンズの高地に集まって住んだ。低地は農地として確保するためだ。ネパールの農村は遠く僻地に行っても集落型だ。そして、農地を減らさないために、家族が増えると建物は3階4階と上に伸びていく。農村の建物の屋上の柱には、増築のために鉄筋を残したままだ。

加えて、ネワール族は不浄を忌み嫌う。だから、便所や洗い場は1階にあり、祭壇や台所、家族が集う居間は最上階になる。余震を怖がるのは当然だ。

カトマンズとの境界のバグマティ川に着くと、女性の泣き声が聞こえる(写真-6)。バグマティ川はガンジス川に繋がる聖なる川である。ここには川にせり出した火葬場がある。焼骨を川に流すのだ。

遺体がある。地震で死んだわけではない。地震があっても葬式はしなければならない日常があった。

上流にあるヒンドゥー教の大寺パシュパティナート寺院にも、同様にバグマティ川に面して11箇所の火葬場がある。震災後、地震でなくなった数多くの遺体を焼き続けた。

川には人道橋が架かっている。手前には小屋掛けの喫茶店があり、人々がたむろしていた。



写真-6 バグマティ川に面したパタンの火葬場

(2)カトマンズの街

人道橋を渡るとカトマンズだ。パタン側とは対照的にカトマンズ側の河川敷には多くの人が集まっている(写真-7)。カトマンズにはスラムはないと言われているが、河川敷にはスラムとも言うべきバラックが建ち並んでいる。



写真-7 バグマティ川のカトマンズ側

カトマンズに入ると急に通りが広くなり、商店街となる(写真-8)。建物はまったく無傷である。看

板の落下やマネキンの転倒、ガラスの破損を見たが、無視できるほどわずかである。不思議なのは、屋上の一番高い所に必ずある、ドラム缶よりも太く重い給水タンクが落ちてないことだ。火災は全くない。電気は通じていないので店はすべて閉められていた。人通りも少なかったが、都心に向かうほどに、歩く人の数が増え自動車も増えてきた。しかし、タクシーが捕まらない。



写真-8 カトマンズの商店街通り

カトマンズの街を2.5キロほど歩くと、ようやくタクシーを拾うことができた。前王宮に近いホテルに向かう。パタンの学校からここまで、消防車のサイレンと救急車のサイレンを聞いてない。別の場所に出動していたのかは不明だ。タクシーは大きく迂回して、2008年に廃位されるまで国王が住んでいた前王宮の前を通る。塀が倒れ王宮の入り口が壊れていた(口絵-24、25)。

ホテルに着くと、大きなトランクがいくつも外に出されている。その脇には白人が立っている。4つ星ホテルが壊れていた(口絵-26)。

よく見ると、ホテルの壁にクラックが走り、モルタルがはがれ、玄関のガラスも割れて中は暗い。ホテルマンは危険だから立ち入ることはできないと言う。尾崎会長が薬を飲まなければならないと言って、従業員を促して泊まっていた4階の部屋に入る。電子キーなので開けられるのか不安だったが、バッテリーが働いていて入ることができた。

部屋の中は天井から水が漏れてビシャビシャだ(写真-9)。天井板も落ちている。私のトランクはちょうどその下であって、中も水浸しの状態で衣類や本が濡れてしまった。持ち上げると、水が流れ出

た。階段を下りる途中で、白人を連れた従業員とすれ違ったので、入れないという建前とは違うようだ。



写真-9 ホテルの漏水した室内

ロビーには非常灯がつき、ホールにあった彫像が倒れ粉々になっていた。

ホテルまでついてきたサローズが「私の家に行きましょう」と言ってくれたので、同じタクシーでサローズの家に行くことになった。すでに20日に訪問して夕食をごちそうになっている。家はホテルからわずか1キロほどのところにある一戸建て住宅である。昨年完成したばかりの鉄筋コンクリート造りの3階建ての堅牢な建物だ。地震による被害は、3階にある食堂の食器棚のガラスが割れていたことくらいで、柱、梁は太く、震度7でも耐えられるほどである。

サローズの向かいに建つ5階建てのマンションは、ワンフロアを1世帯が使う豪華なものだ。2階と5階しか入居者がおらず、1階部分はピロティになって壁がない。この建物の柱にクラックが走っている。はたして設計ミスなのか施工が悪いのか。

通りから一番奥まった袋路にあるサローズの家の前には空き地があって、多くの住民が集まり、自動車も避難していた(口絵-27)。サローズの家族4人とお手伝いさんもいた。どうやら、政府から家に入らないように指示が出ていたようだ。1階を貸している夫婦が鍵を持たず飛び出したため、サローズに開けてもらっていた。

家族は余震を怖がって家に入ろうとしない。サローズの家族はこの日と次の日も外で寝た。

私と尾崎会長は地震は終息していくはずだと考え

ており、私たちだけが家に入った。2階の客間で、懐中電灯で照らしながら、ふたりだけで安着祝いをしているときに、苫小牧のAさんから尾崎会長に安否を尋ねる電話が入った。と思っていたら、後日、尾崎会長と岩倉苫小牧市長に地震の報告をしたときに、市長からだったことが分かった。何本も電話が入っていた。混線していて、声がよく聞こえなかったのだ。私の携帯は日本とつながっていなかった。

相変わらず余震はあるものの、私たちがベッドでゆったりと寝ているとき、サローズを始めカトマンズ市民は余震を恐れて外だった。

苫小牧ネパール協会のネパールでの支援者はサローズのほかに、ジャヤ、ヒラカジ、ラジェスがいた。セレモニーを手伝ったメンバーだ。

ジャヤはバクタプルで旧王宮広場のすぐ隣でホテル「ヴァジャラ・ゲスト・ハウス」と、旧王宮広場に面してレストランを営んでいて、ホテルと一体となっている自宅の一部が壊れテント生活だ。このホテルには23日に、尾崎会長とバクタプル観光をかねて泊まった。バクタプルの旧王宮広場の原形の最後を見たことになる。

ヒラカジとラジェスはカトマンズに自宅があって、中のものが倒れ入れない状態だ。ラジェスの家は間口が狭く6階建てなので、なおのこと余震が怖い。ふたりとも家族ともどもテント生活となる。

サローズたちが停電で一番困ったのは、連絡のために欠かせないスマホの充電である。さいわい、1階の夫婦がバッテリーを持っていたので充電できた。夜間は停電が当たり前なので、ソーラーパネルを置いてバッテリーを充電している家は少ない。

実のところ、なぜ日本では大騒ぎになっているのかが分からなかった。私たちが歩いて見てきた範囲では、寺院や古い建物は崩壊してもふつうの家はそのまま残っている。火災も起きてない。ましてや、地震による死亡者や負傷者に出会うこともなかった。新聞もテレビもないので、どのように報道されているのか知りようがなかった。

ポカラに行って初めて新聞とテレビ放映を見た。カトマンズでは見たことのない破壊や崩壊、被災者

の救助活動が報道されていた。これを見れば、誰でも心配するはずだと理解できた。

都市は平常時の対応能力を超える災害に遭遇したときに、都市機能を喪失する。その災害や被害の規模が対応能力をどの程度超え、どの時点で、対応不能になるのか予測することが必要だ。対応不能の場合には、外部からの救援が必要になる。なにから優先的に救助が必要か、都市は把握していなければならない。

都市は災害による負荷がわずかに過剰であっても、都市機能を失ってしまうはずだ。人や物の資源が限られている以上、対応できる現場の数や種類は限られてくる。3カ所の建物の崩壊現場や火災現場に対応できても5カ所では無理かもしれない。

カトマンズはもともと道路は狭く、自動車、重機も十分でない。医師も病院も不足している。地震でただちに都市機能を喪失したのは理解できる。だから、自国と比べて、ネパールを非難しても意味がない。建物の崩壊現場で動いているのは人間だけと言っている。すべての現場を通じて、重機といってもパワーショベルを見たのは、カトマンズの旧王宮広場の1台だけだ(写真-10)。



写真-10 カトマンズ旧王宮広場の重機

今回の震災が幸いだったのは、地震が起きた日が土曜日で正午近くであったことだ。毎週、土曜日だけが休日で、ほかの日ならば子供たちは学校にいた。地震の訓練を受けていない子供たちは出口に殺到し、けが人も出たことだろう。不安に思う親は壊れた家をおいてでも、子供を迎えに学校に行くはずだ。

加えて、ネパール人は基本的に1日2食のため、火を使うのは朝晩だけで、昼は簡単な食事ですます。

昼休みも午後1時からである。これが火事になかった要因だろう。

(3) バクタプルの街

23日から24日までカトマンズを離れバクタプルにいた。バクタプルは旧王宮広場を取り囲むように広く旧市街地を景観保全をしていた(写真-11)。

こうした施策を採っているのは3都市の中ではバクタプルだけだ。旧市街地の外郭に12箇所の料金所がある。入るためには、外国人観光客はパスポートを提示して1,500ルピーを支払わなければならない。日本円にして2千円に近い額だ。サラリーマンの給料が3万ルピーという、貨幣価値が日本の10分の1ほどの国で、いかにも高い。

しかし、そのことによって古都の景観が3都市の中で最も保全されていることも確かだ。街なかでふつうに傾いた壁やすき間のできた壁を見る。このたびの地震で最も被害を受けたのはバクタプルだろうと考えている。



写真-11 バクタプルの古い街並み

泊まったホテルはジャヤが父親の所有していた自宅の隣に5年かけて建築したものだ。景観保全の地区にあって、ネパールの支援者の中でジャヤだけが自宅の修理が進んでいない。

ジャヤのガイドで旧市街地を歩く。紹介してくれた土産物店は、プジャリ・マート(木彫美術館)の向かいにあって、もっとも景観保全の厳しい街区にあった。オーナーはもと大学教員で、木製の古い柱と梁を買い集めて、隣接する建物で外壁はそのままに内部の造作を改修している(写真-12)。買った梁にはブッダの生涯が描かれている。見ると、柱は床

から立ち上げて梁は木のくさびで天井と固定しているだけだ。階層ごとに柱、梁は独立している。1階から4階まで繋がっているのはレンガの壁だけだ。横ゆれがくれば、それぞれの階層がバラバラに動き、ダルマ落としのように建物の崩れる姿が目浮かぶ。



写真-12 古建築の改修中の内部

4. 翌日、カトマンズの街を歩く

翌26日、食事のあと、9時ころに家を出て、サローズと息子のスヨグ君(11歳、幸運という意味)と旧王宮広場に向かう。旧王宮広場は西に2キロほど。政府の指示で、26日から3日間、学校、企業は休みになった。バスも走っていない。

サローズの家のすぐ近くに、建設中の17、18階建ての巨大なマンションがある。壁や柱にクラックが走り、中程の棟が傾いて、棟と棟の間にはっきりとすき間が開いている(口絵-28)。

安全のため大きな通りを選んで歩く(写真-13)。自動車は異常に少なく、オートバイのみが警笛を鳴らして走る。人は歩くしかなく車道にまで広がっている。5、6階建てになる商店街の被害はまったく見られない。レンガの塀はどこでも崩れていた。



写真-13 静かな商店街通り

停電の中でも、市民が当面、生活するために必要な店は開いていた。薬屋、八百屋、雑貨屋、食堂は利用する客が多い。テント生活の市民は食堂で食事をし、飲料水を買っていた。大学横の広場では避難者の横でペットボトルの水売りが、旧王宮広場の入り口では集まってくる見物者のために食事の屋台が出ていた。

軍が管理する 20～30 ヘクタールになる広場「ラトナ・パーク」には、数千人の避難者が集まり、テントを張りシートを敷いて横になっていた(口絵-30)。テントといっても実際は、組んだパイプに工事用シートをかけただけのものがほとんどだ。若い人たちは音楽を聴いたり、トランプをしていた。悲壮感はない。軍は簡易トイレを設置し、炊き出しテントや給水車には避難者が並んでいた(写真-14)。



写真-14 ラトナ・パークの炊き出しテント

ラトナ・パークを抜けて、旧王宮広場の手前でビムセン・タワーの崩壊現場を見る。ビムセンは大胆な改革を進めたシャハ王朝時代の名宰相である。彼が 1832 年に建設したのがビムセン・タワーである。

地震直後の第 1 報がこのタワーの崩壊と 24 名の犠牲者だ。ポカラで見た翌日の新聞に載せられた第一面の写真がこれだ。ちなみに、裏面の写真はカトマンズの旧王宮広場で崩壊したシヴァ寺院とナラヤン寺院だ。

たいへんな人出で、なかなか近づけない。塔が根本から斜めに切り取ったように崩れ落ちている(口絵-29)。レンガで積み上げた塔の中に階段があって、展望台まで昇ることができた。元の高さが分か

らないので、サローズに聞くと、案内板を見て 61 メートルだと言う。ガイド本には約 52 メートルと書いてある。

旧王宮広場の入り口には、オートバイが群れをなして停めてあり、次から次と入ってくる。王宮崩壊のニュースを聞いて見物に来たようだ。

カトマンズの旧王宮広場は壊滅状態である(口絵-1～14)。私は地震前の 22 日にここを見ている。まったく違う風景があった。正面から入ることができないので、左から迂回して向かう。すぐに壊れた王宮が目にはいる。

手前のバサンプル広場は避難してきた人でいっぱい(口絵-4)。避難者はシートの上に座って、日よけの傘を差している。その横を見物に来た多くの市民と移動する。

王宮はかろうじて一部、原形は残しているものの復旧は不可能なほど崩れている。王宮のバルコニー正面にあって、大きく存在感のあったシヴァ寺院(1688 年建立)とナラヤン寺院(1649 年建立)がレンガの山となり、そして、カトマンズの語源となった、一木から造られたという伝承のあるカスタマング寺院(1596 年建立)も崩壊した(口絵-6、7)。

クマリがいる館(1760 年建立)も外観はそのままだが、少し傾いている。クマリとは、生きた神さまで、女神クマリの化身として初潮前のネワール族の少女から選ばれる。

旧王宮広場の入口とラトナ・パークを結ぶ大路はニューロード。この通りに交差して商店街が広がる。商店街がセットバックした 1 階部分に避難者が体を横たえていた(写真-15)。



写真-15 店舗軒下の避難者

再び、ラトナ・パークを横切って家に戻る。サローズは雑貨屋からマンゴージュースを買ってきた。もと来た道に戻り、サローズの自宅近くまで来るとまた地震だ。鳥の群れが飛び立ち、電線が大きく揺れた。午後1時少し前。震度は3程度か。若い女性が悲鳴を上げて尾崎会長の腕にしがみついた。スヨグ君はお経を唱えていた。

サローズの家の前の空き地には大勢の人が集まっている。午後4時から夜の9時までの間にマグニチュード9の地震が起きるといふ。サローズの家族は私たちを置いて7時に外に出る。しかし、雨が降ったので、玄関で寝たという。私たちは停電の中、それも知らずにベッドで寝た。

スマホで見るニュースでは、地震で2,200人が亡くなり、6,000人がけがをしたと流れる。

空港は25日は閉鎖されていたが、26日には、国際線は断続的に運用されて午後4時再開、国内線は終日閉鎖とのこと。

日本に住んでいるネパールでの支援者デブが25日にカトマンズ上空まで来ながらバンコクに引き返した。26日の午前中にはカトマンズに入っている。デブは日本人と結婚して千葉にいる。

27日は国内線を再開するという。カトマンズにいても動きようがないので、もともと予定していたポカラへ行くことにした。

5. 大地震は81年前にもあった

ネパールは地震がないと考えていたが、インド大陸がユーラシア大陸にぶつかって褶曲山脈を作り出す場所なので、地震の巣であることは日本と同じように自明のことである。

歴史を振り返っても、古くは1255年に大地震が起きた記録がある。近年では1833年に4度の大地震が起きて、バクタプル、カトマンズ、パタンで多くの家屋が倒壊している。

およそ百年後の1934年には、ネパール、北インドに大地震が起きて、死者1万7千人、負傷者3千600人、倒壊家屋34万軒にもおよぶ、甚大な被害を及ぼした。ヒムセン・タワーも大きな被害を受けた。しかし、被害の半分は北インドに近いタライ地

区に集中した¹⁾。

81年ぶりのこのたびの地震は、数次の地震に耐えてきた16世紀から18世紀にかけて建立された王宮や寺院の多くを破壊し崩壊させた。そういう意味では、カトマンズ盆地にとって数百年に一度の大地震と言えよう。

いっぽうで、寺院の被害に比べ一般建築物の被害は少ない。技術の進歩によって都市が強化されたのだ。百年に1度の大地震は確率の対象になる。日本でも大地震が起きるたびに建築強度を上げてきた。そうした取り組みをこれを機会にネパールでもすべきだ。

地震の被害は建物だけでなく、電気、水道、ガスといったライフラインにも及ぶ。これらを供給系のライフラインとすると、このほかにも道路、鉄道の交通系と電話、放送の通信系がある。

先進国では、こうしたすべてのライフラインをすみやかに復旧しなければならない。しかし、ネパールでは電気は停電が当たり前、水道は給水がまればだ。水は給水車から買うのだ。しかも都市ガスはない。道路は未整備。そもそも自動車が少ない。普及しているオートバイなら未整備の道でも走ることができる。鉄道もない。電話は固定を経験する前に携帯、スマホに移行しているので、大きな影響はない。貧困国では先進国の常識は通用しない。

日本では供給系のインフラの復旧が急がれる。電気・水道・ガスの復旧期間は3日・3週間・3箇月と言われている。カトマンズでは電気は28日には復旧していたので先進国なみだ。

6. ポカラは別天地だった

もともとポカラにはレンタカーで行くつもりだったが、道路が落石の危険性があるので、飛行機で行くことにした。航空券は電話予約ができず、前日客優先のため、空港に直接出向いて買わなければならない。27日朝6時半に尾崎会長とサローズが空港に出向いて予約した。幸い、支援者のラジェスが元空港職員だったので、空港の中に入って航空券を確保してくれた。外ではキャンセル待ちの客が並んでいた。帰りの航空券は事前に予約してあった。片道

ひとり 113 ドルとなる。これはネパール国民の 2 倍の料金である。

9 時過ぎに、3 日分の荷を背負って、サローズとヒラカジのオートバイ 2 台に分乗して空港に向かう。空港まではサローズの家から東にわずか 3 キロほどだ。交通機関が止まったとき、オートバイほど便利な物はない。広い道路を選んで走るが、レンガが崩れた狭い道路もオートバイなら難なく走ることができる。ガソリンスタンドはオートバイ用と自動車用にわかれている。オートバイ用のガソリンスタンドは開いていて、タンクは満タンだ。

滑走路は 1 本しかない。外国空軍のジャンボ輸送機が次から次と着陸する。空港は海外からの救援機が優先のため 1 時間ほど待って、ブツダ航空のプロペラ機でポカラに飛ぶ。定員 50 人のところ、子供を入れても 35 人しかいない。

離陸すると上空からサローズの近くの巨大マンションが見える。そのくらいカトマンズでは大きな建物だ。200 キロの距離を 25 分で結ぶ。震源地のゴルカはカトマンズとポカラを結ぶ線のカトマンズ寄りだ。

ポカラ空港からホテルまでは 1.5 キロ。「ホテル・アジア」はデブの妹スバトラの夫ドラマが経営する。スバトラは旅行会社を営み、日本語に堪能で苦小牧にも来たことがある。ドラマも少し日本語が分かる。そういうわけで、カトマンズでもポカラでも日本語が通じ、言葉では不自由しなかった。これが尾崎会長が 20 年かけて創った学童支援のシステムだ。英語を少し話すことができればまったく問題ない。

このホテルで初めて、地震についての新聞とテレビ報道を見る。テレビは「Earthquake News」という番組が被災した場面だけを繰り返し 24 時間流しっぱなしにしている。新しいニュースが入ると、その都度、挿入している。カトマンズでも、日本でも、ニュース源はこの番組である。これを見る限り、ネパール全土、カトマンズは壊滅状態にあると考えるのも不思議はない。インド政府がネパールで働いているインド人を自国に引き上げようとしているのは理解できる。

古都ポカラは人口 30 万人とスバトラは言う。気候は涼しく過ごしやすい。フェワ湖の岸辺が観光地となってホテルや土産物店が建ち並ぶ。観光客はカトマンズを経由して入るため、キャンセルが相次ぎ 9 割減だという。私たちがいた 3 日間は人通りも少なく閑散としていた。2 泊した「ホテル・アジア」でも、カトマンズに帰る 29 日朝、トレッキングに向かった 16 名の中国人と私たちが最後の客で、それ以降の予約はない。

ポカラはまったく別天地だった。確かに大きな地震はあったというが、地震の被害は全くなく、市民は日常生活そのものの中に暮らし、オールドバザールやニューバザールは車と人の喧噪で、地震前のカトマンズと同じである。古い街中も歩いてみた。1 階は石積み、2 階からはレンガ積みの古い建物も数多くあるが、まったく無傷である。

帰って調べてみると、カトマンズとポカラの地盤が違う。カトマンズはカトマンズ・ナップという地盤、ポカラはその下にあって、それより古いナワコット・ナップという地盤の上にある。いずれもインド大陸がユーラシア大陸に潜り込むことによってできた褶曲地盤である²⁾。

28 日、朝 5 時前に、暗い中ホテルを出発して、標高 1,592 メートルのサランコットの山頂展望台に昇り、5 時 31 分の日の出を見る。正面はヒマラヤ連邦だが、曇って見えない。展望台で年長の日本人に会う。日本人のオーナーが造る山頂近くのホテルの現場監督で、3 月に来て来年の 5 月までいるという。「毎日、展望台に来る。地震前は晴れてヒマラヤがはっきり見えたが、地震後は雨が多くなった。3 月に地震があったので、ネパールでも地震があるのかと不思議に思った」と語った。

確かに雨期でもないのに雨が多い。10 日間滞在して、7 日間雨の日があった。

この日、スバトラの旅行会社の前には災害支援物資が集められていた(写真-16)。大量のペットボトルの水と衣類、食糧である。

29 日朝、帰るためポカラ空港に着くと、空港には支援物資が集まり、荷を積んだ 7、8 機の軍のヘリコプターが次々と離陸していった。多くの中国人

学生トレッカーを乗せたブッタ航空機は定刻どおり飛んで、11時過ぎにカトマンズに戻る。サローズとヒラカジが空港で待っていて、オートバイでサローズの家に行く。



写真-16 スバトラの旅行会社前の支援物資

バクタプルのジャヤは自宅の修理で動きがとれないが、ラジェスが来た。ラジェスは28日、ヒラカジは29日の朝から自宅に戻り、電気もつながり、元の暮らしに戻っている。

空港近くでは、インド人を乗せたバスが10台ほど連なって走っていった。前日のニュースでは、臨時のバスターミナルに向かって、インド人が空港近くまで並んでいる様子が映し出されていた。インド政府は旅客機やバスをチャーターして、帰国を促している。

ネパール政府も400台のバスを用意して、地方に帰る人には無料で100キロの距離まで送ることにしている。それから先はバスを乗り換えて進むことになる。

物が不足してきたので、店では売り惜しみをして、知っている人にしか売らない、2倍にして売ろうとする、ということが起きている。テント不足で1,500ルピーのものが6,000ルピーまで上がっている。

学校も企業もまだ休みが続いているが、銀行だけは営業していて、ひとり5万ルピーまで引き出すことができる。ホテルは高級ホテルは営業している。

バス、タクシーは5パーセントだけが稼働している。ガソリンがないのは、タンクローリーの運転手

が田舎に帰ってしまったからだ。

7. 農村ブンガマティの被害は大きい

午後3時前、看護師のラクシミの家が壊れているというので、サローズの家から南9キロのブンガマティにタクシーで向かう。彼女は支援学生の1期生で、苫小牧に来て、市内の病院で1ヶ月間研修を受けている。タクシーの運転手に聞くと、ガソリンは3時間並んで5リットルしか買えないそうだ。

22日の午後、ブンガマティから7年ぶりに山車(ネパール語でも「だし」と言う)がパタンに向けて出るというので、地震で壊れる前の彼女の家を訪ねている。山車巡行はパタン王国の時代からあって、王国同士が交戦中であっても巡行時には一時休戦したほど重要な祭りだ。山車は17メートルの高さがあるので、引くのが大変だ(口絵-17)。倒れるとその年は凶事が起きるといわれている。

ラクシミの家は間口4メートルほどのレンガ造りの4階建て(口絵-15)。1階はトイレと水場。はしごのような階段を上ると客間があり、デコボコの床板にむしろを敷いただけの4畳ほどの部屋である。こうした家が壁を共有しながら5、6軒の長屋を形成している。1軒おいて隣には牛が飼われていた。

パタンを通過して、その南のブンガマティまでの道筋で営業している店は、やはり薬屋、八百屋、雑貨屋、食堂であり、加えて床屋、ガラス店、オートバイの修理店も見られたので、平常時に戻りつつあるようだ。途中、地震のために休止している山車を見た(口絵-18)。

およそ20分でブンガマティに入ると、7日前にはお祭り広場だった場所にたくさんのテントが張られている(口絵-31)。テントというよりもテント代わりのシートのほうが多い。広場に面した役場の建物には多くのボランティアが集まり、救助活動をしていた。そこを拠点に、ラクシミは薬剤師を中心に看護師仲間4人と医療活動をしていた(写真-17)。人口約5千人のこの町では7人が亡くなったという。人口千人あたりの死亡率は1.4人となる。カトマンズでは1,200人が亡くなっているのを、

1.2人だ。ちなみに、阪神淡路大震災での神戸は3.1人だったので、神戸の被害が大きかった。



写真-17 ボランティアのラクシミ

壊れた建物はカトマンズと比べると目立って多い(口絵-34)。古いレンガ積みの家が多いためだ。しかし、新しい建物も建っていて、柱、梁構造の鉄筋コンクリート造りなので、ペンシルビルのようにか細くても地震に耐えた(口絵-33)。

ラクシミの家はレンガ積みだが、4階の壁全部と3階の一部の壁が崩れているものの、建物は残っているので家財は無事なようだ(口絵-16)。長屋を形成する隣からの3軒は2階部分しか残らず、4軒目は完全に崩壊している。ラクシミの家が残っただけの格好だ。

山車を繰り出した由緒あるマチェンドラナート寺院(1408年建立、1673年再建)は完璧に崩れ落ちて、レンガの山になっていた(口絵-35)。寺院の周りは広場になって、古い建物が方形に囲む(口絵-36)。これらも崩れている。寺院への参道が坂道となって、そこに建つ家も崩れ落ちている。ラクシミの家も寺院に連なる位置にあり、寺院とともに古くから形成された門前町だ。こうした地区の古い建物が壊れている。

ダイナム校長のいる学校に寄った(写真-18)。鉄筋コンクリート造りの建物なので、住民の避難所となって、彼自身の家族も含め50人が避難していた。電気は28日から通じ、学校周辺だけは利用できるようになった。休校は3日間から5日間に延びて、5月1日から授業を再開するので、避難者たちは別の場所に移動しなければならない。



写真-18 ブンガマティ小中学校

私たちは、ネパール最後の日はパタンの新興住宅地にあるデブの家に泊まった。斜面に建つ鉄筋コンクリート造りの地下室を持つ2階建てだ。地震による被害はまったくない。尾崎会長専用の部屋がある。

デブは地震のため、25日に入る予定が延びて、翌26日の午前にカトマンズ入りした。荷物が届かないために、家に着いたのは午後4時を過ぎた。

しかし、すぐに日本から仕事が入り、テレビ朝日の「ニュース・ステーション」の取材クルーに通訳として付いて被災地を廻ることになった。私たちが帰る30日にも午前8時に仕事に出かけた。

地震による死傷者の数は、ネパールを離れる前日の夕方のニュースでは、死者は5,100人、負傷者10,200人になった。



写真-19 カトマンズ空港の日本大使館員

30日、いよいよ帰国の日だ。タクシーで空港に着く。サローズ、ヒラカジ、ラジェスが見送りに付いてきた。空港では入り口付近に日の丸の国旗が垂

れ下がり、大使館の職員に声をかけると、「なにかお困りのことはありませんか」と聞いてくる(写真-19)。別にないと答えて名簿に名前を書いてきた。日本のほかに韓国の旗もあった。

午後1時30分、定刻通りタイ航空機はカトマンズ空港を離陸した。機上からはカラフルなテントが見えたが、数は少なくなっていた。

8. 日本で考えたこと

ネパールで子供たちの貧しさに出会って、なぜこんなにも貧しいのかと考えた。しかし、彼らは貧しさは平気だ。悲壮感はない。彼らは私たちの支援をどのように受け止めているのか。

ひるがえって、ネパールに比べてはるかに豊かな日本では、子供の貧困が問題になっている。これは子供ではなく、子供の貧困を問題にする、大人の問題ではないのか。

大地震に遭った。建物はほとんど壊れていない。避難者は明るく元気だ。崩壊現場には次から次と大勢の見物者が集まる。海外から救援隊が来ているのに、なぜ彼らは救援活動をしないのだ。

日本に帰って考えた。紙数に限りがあるので、日本で考えたことの一部を報告する。

(1) 災害報道のあり方

報道で一番大切なことはきちんと事実を伝えることだ。建物が破損し、倒壊したのはどの場所でどんな構造なのか。救援が急がれるのはどこか。

避難者は余震が怖くて広場に集まった。元気な人はたくさんいた。崩壊現場にはオートバイに乗って見物者が続々と集まった。災害救援システムができていれば、彼らを活用できたのだ。

事実を正しく伝えることによってはじめて、取り組むべき課題と必要な対策が見えてくるはずだ。被災箇所を地図に落とすだけでも分かることがある。

地震とは関係ないが、マスコミの表現で気をつけなければいけないのは、「……することが求められている」と受動態で表すことで、客観性を持たそうとすることである。本当は、記者である「私」の考えであるはずだ。

技術論文でも、「……と考えられる」「……と思われる」と書く人がいる。これは間違いだ。考える主体が消えることで、あいまいな文章となって結論が弱くなる。表現に受動態をなくすだけで、文章はよほど明晰になる。

(2) 危機管理のあり方

ネパールでは、ほぼ百年ごとに大地震が起きている。にもかかわらず、大きな被害を受けてしまった。

日本も偉そうなことは言えない。敗戦直後まで地震や風水害によって数千人規模の犠牲者を出してきた。だから私たちは、こうした経験をもとに国土を強化し、建物の強度を上げてきたのだ。

地震で怖いのは火災である。阪神淡路大震災と東日本大震災で起きた火災の原因は電気火災である。

オール電化が進んでいる中、家庭用火災報知器の設置と同様に、地震時を想定した電気火災対策を義務づけるべきだ。オール電化を推進する電力会社やハウスメーカーに責任がある。

(3) 国際援助のあり方

① 援助が届いてない

ローマ・クラブの事務局長ベルトラン・シュナイダーは、国連食糧農業機関や国連児童基金(ユニセフ)などを統合すべきとした上で、「この種の国際機関では、予算の80パーセントが人件費・管理費・運営費に充てられ、実際のプロジェクトや活動に充てられるのは20パーセントにすぎないことが多い」と訴えた³⁾。

最も信頼すべき国連機関ですら、国際援助の2割しか必要とする人々に届いていないのだ。

このたびの震災でも盛んに寄付を募り、ユニセフに赤十字に、寄付をしたと自己満足している機関がある。本来は、寄付した先でどう使われたかを検証して報告するのが集めた側の責任である。

寄付から自分たちの人件費や事務費を得ているとしたら援助ビジネスと言うべきだろう。

② 援助をなにに使うか

ネパールの国家予算は5千億ルピーである。苦小牧市の一般会計予算のおよそ8倍にすぎない。

そのうちの1千億ルピーを恒常的に海外からの援助に頼っている。しかし、いっこうに貧困から抜け出すことができない。いままでの援助のあり方が間違っていたということだ。

自立できなければ未来永劫にわたって援助を受け続けなければならない。それはネパールにとっても本意ではないはずだ。

サローズは「子供たちに物やお金を与えないでください」と言う。もらうことが当たり前になると、働かなくなってしまうことが分かっているからだ。

経済成長なしには国は豊かにはなれない。経済成長のためには農業から脱却して工業化が不可欠である。ネパールが自立するための援助を優先順位をつけて効果を量りながら着実に進めるべきだ。物差しは貧困からの脱却と持続可能な経済成長だ。

(4) 貧困との向き合い方

① 子供は貧困なのか

日本では子供の貧困が話題になっている。OECDの定義する相対的な貧困率が高いというのである。いっぽうでネパールの子供たちをおそっているのは絶対的な貧困だ。救うべきは絶対的な貧困であることはいままでもない。

食べることができ、住むところがあって、学校に行くことができれば、子供は自身の責任において貧困から抜け出すことができるのだ。できないからといって、社会の責任に転嫁するのは無責任な議論だ。

日本人はいま一度貧しかった時代を振り返り、貧困とまじめに向き合うべきだ。

② 貧富の格差が広がった

貧富の格差が広がったのは1980年代だ。所得税の累進税率が急激に下げられていった。住民税と合わせた直接税の最高税率が83年まで93パーセントだったものが、いまでは50パーセントに過ぎない。この過程で、経営者たちは自らの報酬を上げるいっぽうで、職員の給与を下げ、正規職員を派遣やパートに置き換えていった。福利厚生は真っ先に切り捨てた。

職員は使い捨てだから、会社は腰掛けでいい、不満があれば独立すればいいことになる。これがグ

ローバリゼーションの結果だ。日本の企業に活力がなくなったのは当然だ。

9. おわりに

日本は明治の時代に全国くまなく学校を造り、教育に力を入れたことによって、アジアで初めて近代化に成功した。戦後も教育によって、いまの繁栄を迎えることができた。

私たち苫小牧ネパール協会は、明治や戦後の子供たちのように、向学心が強く成績がいいのに、貧しいために学校にいけない子供たちを支援している。何十人もの子供たちが巣立ち、社会人になった子も医者もいる。

ネパールが経済成長するためには工業化は避けられない。押しつけの産業では失敗する。その国の価値観に合ったものでなければならない。新しい産業を創り出していくのは、自国で教育を受けた若者たちである。貧しさを知っている若者たちこそがネパールを貧困から救い、豊かにしていくことができるのだ。

このたびの震災では、死者数は8,900人を超えたとされる(6月9日付け日本経済新聞)。支援している子供たちの多くも被災している。集めた寄付金は、目に見える形で子供たちに援助をしていきたいと考えている。

参考文献

- 1) 佐伯和彦：ネパール全史、明石書店、2003
- 2) トニー・ハーゲン：ネパール、白水社、1989
- 3) ベルトラン・シュナイダー：国際援助の限界 [ローマクラブ・レポート]、朝日新聞社、1996

中野裕隆(なかの ひろたか)

技術士(建設/上下水道/衛生工学/環境/
総合技術監理部門)

前苫小牧市副市長

